京都渡来文化ネットワーク会議

史跡研修事業

長岡宮散歩

平成２３年４月２４日

桓武天皇が平城京を廃して最初に造営した都「長岡京」。この長岡京遷都を境に時代は平安時代へと進んでいきます。

この研修では、文献の記録を足がかりに長岡宮を散策し、桓武天皇が目指した夢の跡を偲びたいと思います。

① 向日市文化資料館

延暦三年（７８４）から延暦十三年（７９４）年までの都「長岡京」に関する発掘成果を常設展示する資料館です。

長岡京全体の復元模型をはじめ、都の「衣」・「食」・「住」等のテーマで展示を展開しています。

ほかに毎年民俗資料、古文書資料などの特別展示もおこなっています。

※ 長岡京遷都を主導したメンバー

［続日本紀］延暦三年六月十日条『新訂増補国史大系』二

己酉。以中納言従三位藤原朝臣種継。左大弁従三位佐伯宿禰今毛人。参議近衛中将正四位上紀朝臣船守。散位従四位下石川朝臣垣守。右中弁従五位上海上真人三狩。兵部大輔従五位上大中臣朝臣諸魚。造東大寺次官従五位下文室真人忍坂麻呂。散位従五位下日下部宿禰雄道。従五位下丈部大麻呂。外従五位下丹比宿禰真浄等。為造長岡宮使。六位官八人。於是。経始都城。営作宮殿。

※ 長岡京遷都の様子

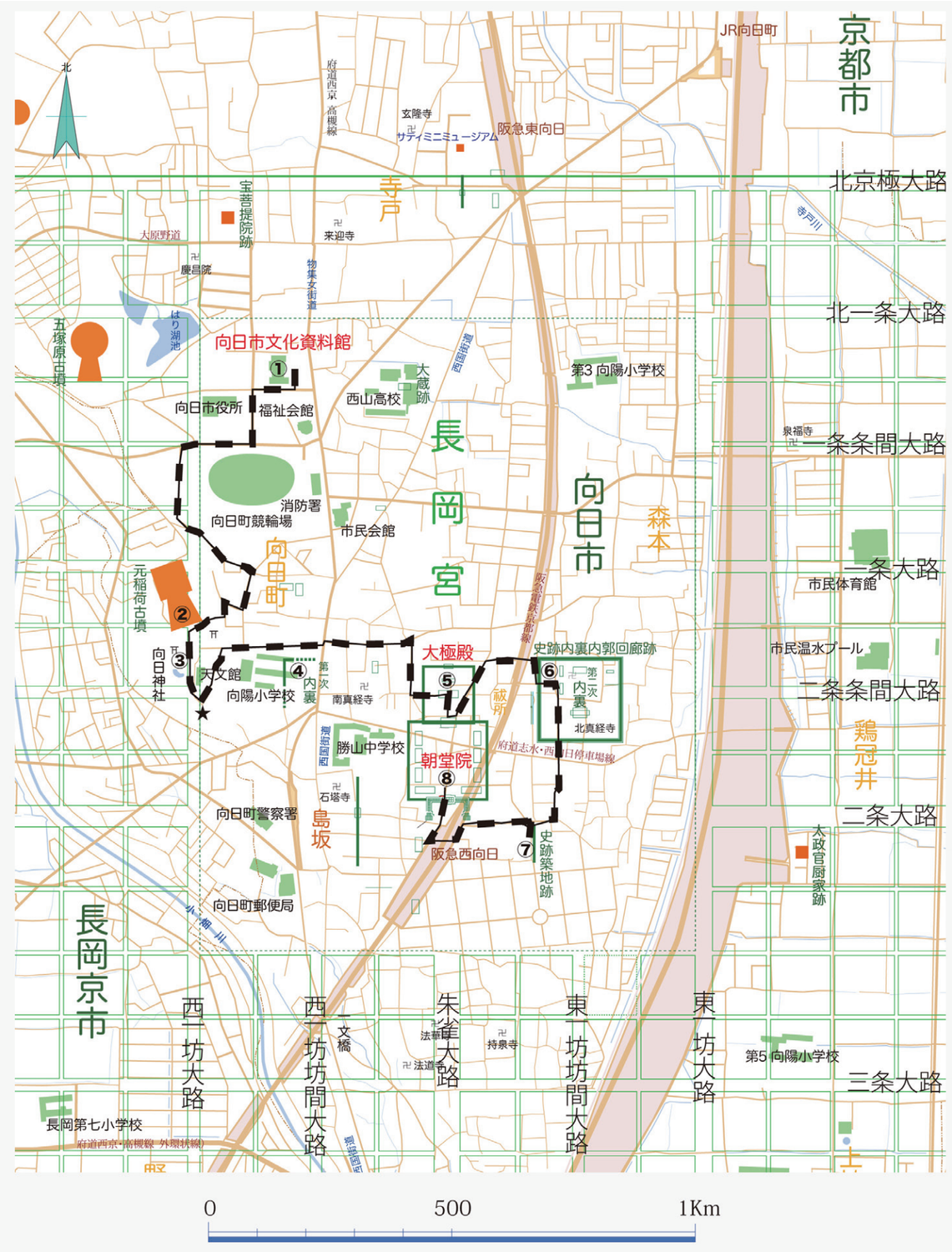
［続日本紀］延暦三年十一月十一日条『新訂増補国史大系』二

戊申。天皇移幸長岡宮。

［続日本紀］延暦三年十一月二十四日条『新訂増補国史大系』二

辛酉。中宮皇后並自平城至。

本日の散歩コース

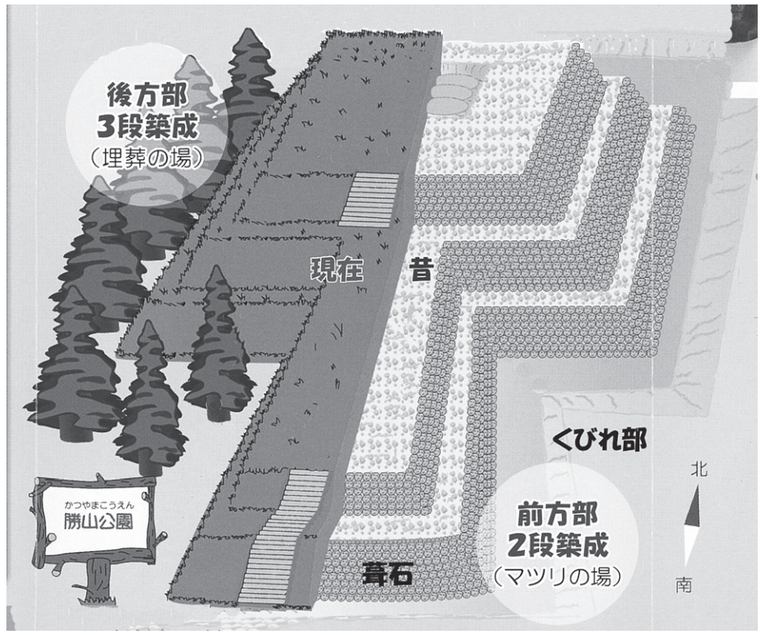


② 元稲荷古墳

★古墳時代前期（3世紀末）京都盆地最古級の前方後方墳で、全長は約92ｍ、後方部の高さは約7ｍあります。

墳丘からは特殊器台形埴輪や壺形土器といった、古墳出現期の埴輪が出土し、墳丘全面に葺石が葺かれていました。

後方部には現在給水塔が設置されていますが、給水塔を作る際に、全長5.6ｍの竪穴石室が発見され、刀剣、槍などの副葬品が発見されました。



元稲荷古墳の復元模式図

前方部の葺石　検出状況（『向日丘陵の前期古墳』より）

③ 向日神社

★平安時代の「延喜式神名帳」に「乙訓坐火雷神社」などと共に掲載されている所謂「式内社」。

祭神は、現在では向日神、火雷神、玉依姫命、神武天皇を祀っていますが、火雷神、玉依姫命、神武天皇の三柱は鎌倉時代に合祀されたもの。現在火雷神、玉依姫命、建角身命を祀る長岡京市・角宮神社と「乙訓坐火雷神社」（乙訓社）を巡る対立が続いています。

本殿は室町時代に建てられ、国の重要文化財に指定されています。明治神宮の本殿のモデルになったともいわれています。

神社には紙本墨書「日本書紀」巻第二神代下（国重要文化財）などが残されています。

向日神社の境内

復元された特殊器台形埴輪と壺形土器
（『向日丘陵の前期古墳』より）

④「西宮（にしみや）」（第一次内裏）

★『続日本紀』には延暦三年（７８４）六月十日の造営開始から五ヶ月後の十一月にはもう天皇並びに中宮（母親）、皇后が平城京から長岡京へと移ったと記されています。

これは、この頃には内裏が完成したことを示しています。

この内裏を「第一次内裏＝西宮」と呼んでおり、完成の早さから、難波宮の内裏を移築したものと考えられています。

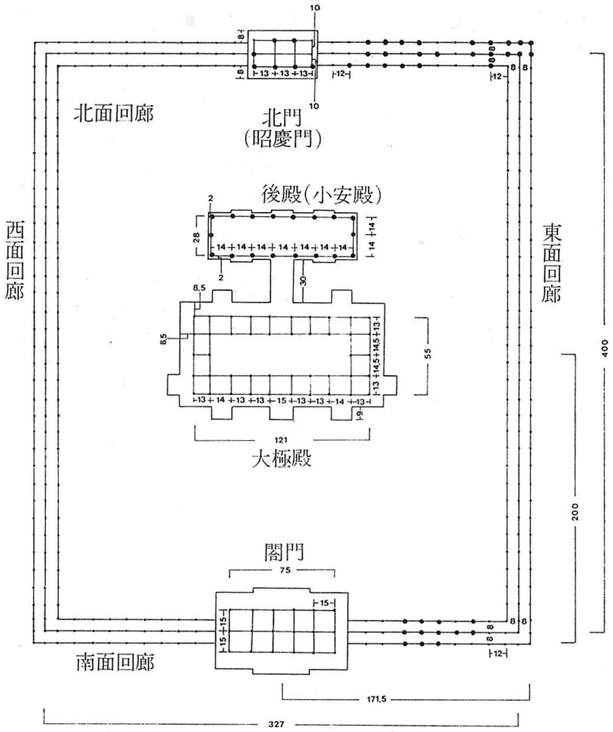
昨年12月、方形に区画する掘立柱形式の回廊（複廊）の北西コーナーが見つかりました。

難波宮式軒瓦を伴い、大極殿の中軸とほぼ同じであることや、柱の間隔が後期難波宮の内裏と一致することなどから、遷都当初に大極殿・朝堂院とともに後期難波宮から移建された第一次内裏相当施設であった可能性が考えられています。

⑤大極殿

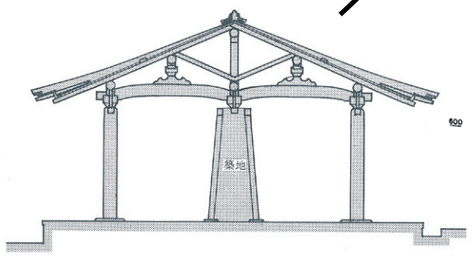
★大極殿地区は回廊で囲まれ、中に天皇が臨席する大極殿と控えの間としての後殿（平安京では小安殿）が配されています。大極殿と後殿は廊下で連結されています。

大極殿地区と朝堂院地区で出土する瓦はほとんどが難波宮のものであることから、これらの施設は難波宮からの移設であることがわかります。



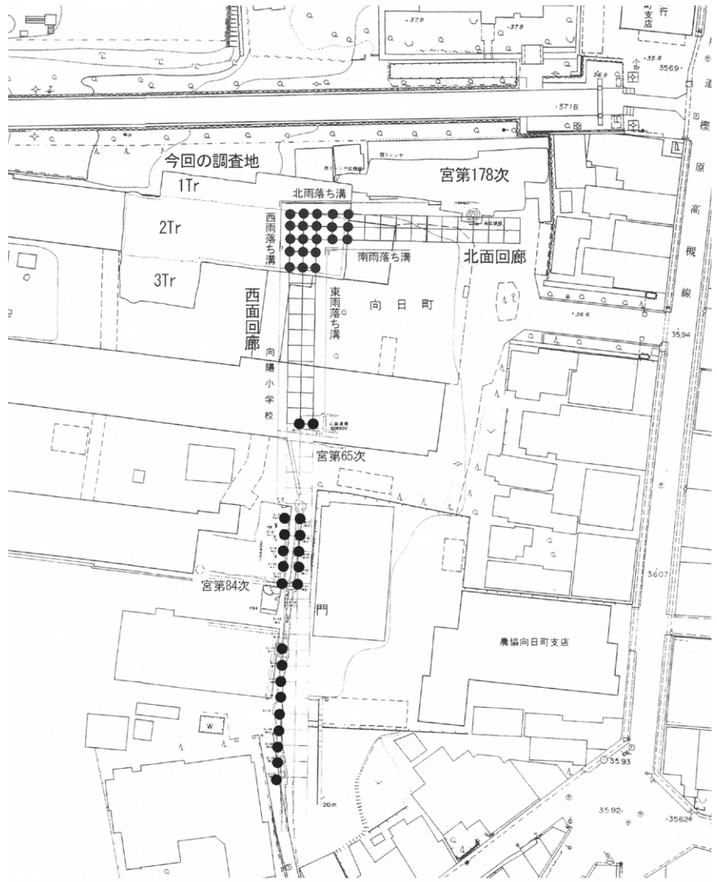
★延暦八年（７８９）の『続日本紀』の記事により、延暦三年に天皇が平城京から移ったのが「西宮（第一次内裏）」で、現在国史跡になっている、大極殿の東にある内裏が「東宮（第二次内裏）」であることがわかります。「東宮」からは平城宮式の軒瓦がたくさん出土しており、平城宮を解体した資材で作られていたことが判明しています。

延暦十年の、平城宮の諸門の解体・移築は、平城宮解体の最終段階であったと考えられています。長岡京では内裏は政治の場である大極殿・朝堂院地区から分離・独立します。これは平安京へも引き継がれます。



「複廊」の模式図

⑥「東宮（ひがしみや）」（第二次内裏）

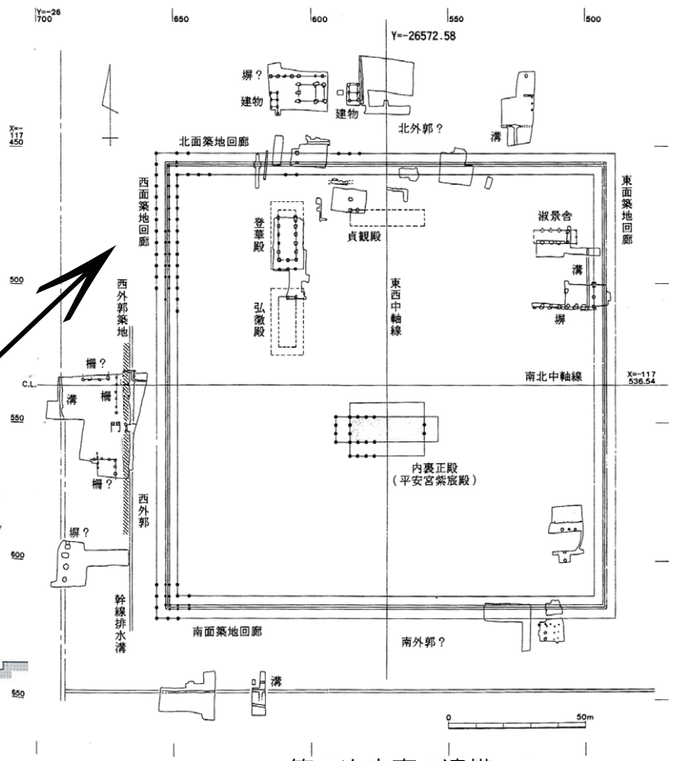


【続日本紀】延暦八年二月二十七日条『新訂増補国史大系』二

庚子。移レ自ニ西宮一。始御ニ東宮一。

【続日本紀】延暦十年九月十六日条『新訂増補国史大系』二

甲戌。仰ニ越前。丹波。但馬。播磨。美作。備前。阿波。伊予等国一。壊ニ運平城宮諸門一。以移ニ作長岡宮一矣。（後略）



第二次内裏の遺構

⑦ 築地跡

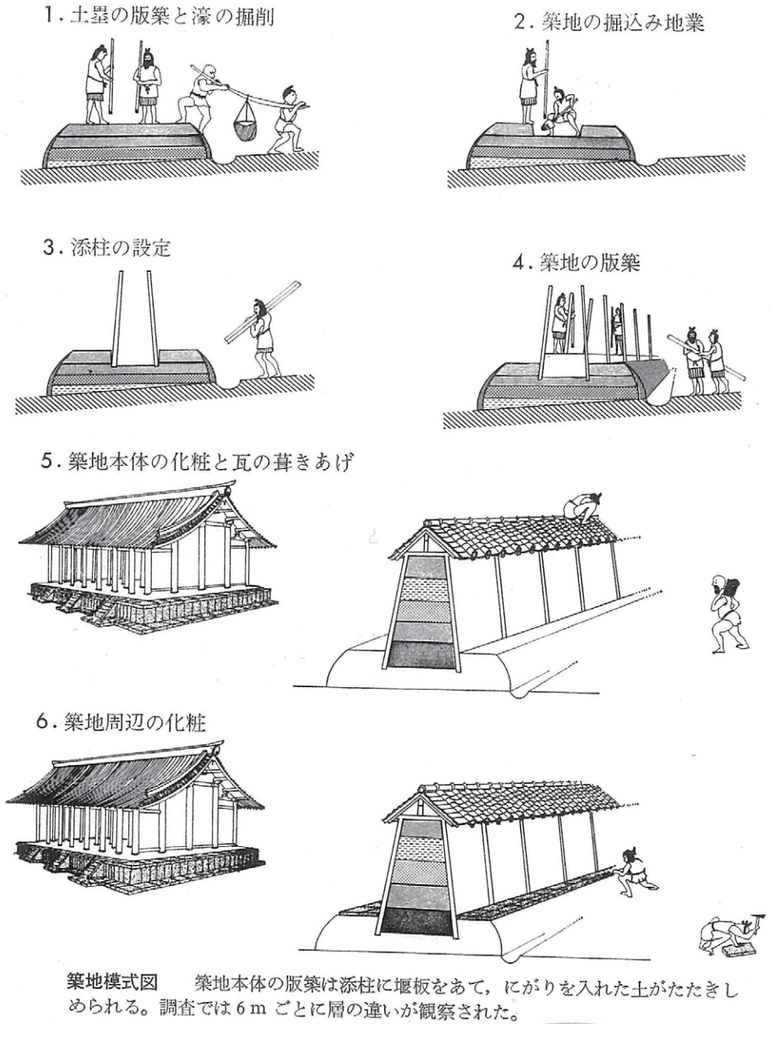
［続日本紀］延暦三年十二月十八日条　『新訂増補国史大系』二

乙酉。山背国葛野郡人外正八位下秦忌寸足長築宮城。授従五位上。外従五位下栗前連広耳飼養役夫。授従五位下。但馬国気多団毅外従六位上川人部広井。進私物助公用授外従五位下。

★一九七九年、水路工事の際偶然発見された瓦葺きの土塀跡。基底幅2.1m、推定高4.5mの塀跡が63mにわたって発見されました。

長岡京の遺構が立体的な構造物として残っている例は稀です。このような大規模な工事には、多くの人の力が結集されていたことでしょう。

造営開始から半年後、私財を投じて造営に貢献した人々に位階が授けられています。渡来系氏族、秦氏は長岡京造営の中心的役割を果たしました。



築地模式図　築地本体の版築は添柱に堰板をあて，にがりを入れた土がたたきしめられる。調査では6mごとに層の違いが観察された。

⑧ 朝堂院

［続日本紀］延暦四年八月二十三日条　『新訂増補国史大系』二

乙酉。授従七位上大秦公忌寸宅守従五位下。以築太政官院垣也。（後略）

［続日本紀］延暦五年七月十九日条　『新訂増補国史大系』二

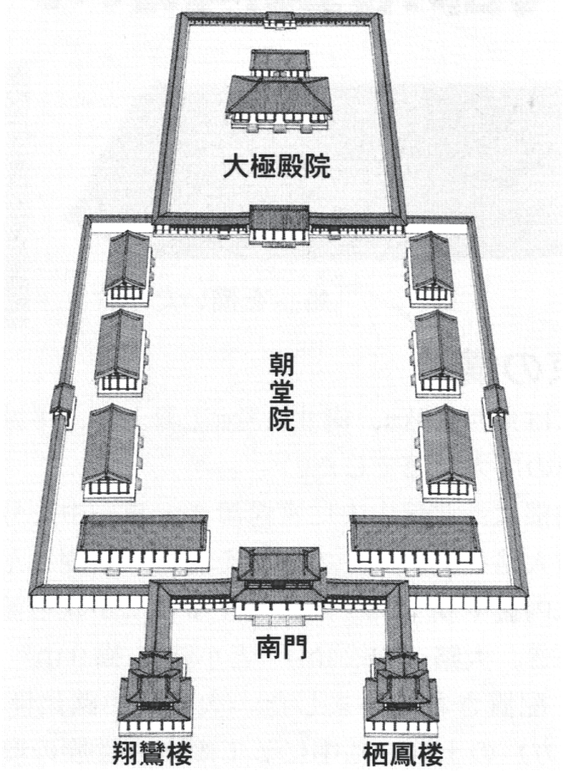
丙午。太政官院成。百官始就朝座焉。

［類聚国史］巻一九〇　風俗部　俘囚　『新訂増補国史大系』六

甲寅。饗陸奥夷俘爾散南公阿波蘇。宇漢米公隠賀。俘囚吉弥侯部荒嶋等於朝堂院。阿波蘇。隠賀並授爵第一等。荒嶋外従五位下。以懐荒也。詔曰。蝦夷爾散南公阿波蘇。宇賀米公隠賀。俘囚吉弥侯部荒嶋等。天皇朝尓参上仕奉弖。今者己国尓罷去天仕奉牟止白止聞食行弖。冠位上賜比。大御手物賜久止宣。又宣久自今往前母伊佐乎之久仕奉波。益々須治賜物曽止宣大命乎聞食止宣。

（延暦十一年十一月三日）

★百官が参集し、朝議や外国の使節を迎える場となる「朝堂院」は、当初「太政官院」と呼ばれていました。それが長岡京の後半には「朝堂院」と改名されたのです。



長岡宮朝堂院復原図

★朝堂院は八棟の建物で構成され、その配列は難波宮と一致しています。このことからも難波宮の移設であることがわかります。

朝堂院南門（平安宮では会昌門）の両側には楼閣が付属していることがわかりました。この楼閣は長岡宮で始まり、平安宮へと受け継がれます。

現在、朝堂院西第四堂、南門、南面回廊、楼閣の一部が国史跡となり、公園として活用されています。